

論 文 要 旨

「心理療法による問題の見方の変化に関する質的研究：

解決志向アプローチによる時間制限面接を用いて」

青木みのり

本研究では、心理療法の多様性を解明し、クライアントにとって有益な心理療法の開発に貢献するために、質的研究法を用いてクライアント個人の主観から心理療法の成果をとらえることを目的とする。

心理療法のエビデンス研究のうち、成果研究は心理療法による変化に関するものであり、プロセス研究は変化につながるプロセスについての研究である。成果研究では、明確で比較可能な性質を備えた量的指標を用いることが望ましいとされてきた(Hill & Lambert, 2004)。しかし量的な指標は、相互性や関係性、個別性といった心理療法独特の要因の解明には向かないことや、研究者やセラピストの枠組みの影響が強く反映されることが指摘されてきた。また、心理療法がクライアントの主観的な苦痛や困難に対応する営みであることや、変化に対するクライアントの要因の影響が大きいこと(Lambert, et al, 1986)から、クライアントの視点からの検討は重要である。しかしこれまでの成果研究では、セラピストや研究者の視点によるものがほとんどであった(Bohart, 2005)。

そこで本研究では、個性記述的な質的分析法である PAC(Personal Attitude Construction)分析を用い、Watzlawick(1978)による、個人の「世界への認識」と「世界への関わり」という2つの視点を軸に、「個人が問題やその解決をどのように感じて体験しているか」という問いについて、セラピストの視点とは異なるクライアントの主体的な体験を明らかにする。さらに、個人内・個人間の相互作用の検討に適している質的分析法の修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(M-GTA)を用いて、複数の事例に共通する要因を抽出し、臨床的示唆を得て理論化を試みる。

第4章までは理論的考察である。まず、諸外国における心理療法のエビデンス研究の動向と、その中で質的研究の現状を概観し、本研究の意義と位置づけを明らかにした(第2章・検討1)。心理療法の成果研究に適した質的分析法が備えているべき特質を検討するとともに、次章において適切な分析法を検討し選択する基準を設定した。次に第3章では、「個人が問題やその解決をどのように見て体験しているか」の検討のために適した方法として、PAC分析の妥当性と優位性を検討した。(検討2)。結果、他の質的分析法と比して成果研究に適していることや、事前事後テストとしてもすぐれていることが示され、PAC分析の採用が適切であると結論づけた。そして第4章では、事前事後テストとしてPAC分析を用いる場合の、比較のための具体的な視点を整理した(検討3)。

第5章から第8章までは実験調査である。第5章では、心理療法を通じて問題のイメージがどのように変化するかについて、解決志向アプローチ(De Jong & Berg, 2007)による3回の試行面接の前後にPAC分析による事前事後テストを行い、個人に固有の世界観における「問題への認識」と「問題への関わり」がどのように変化したかを探索的に検討した(検討4)。その結果、一人ひとりの協力者の固有の主観的世界観における「問題への認識」と「問題への関わり」を明らかにすることができた。すなわち

量的研究の課題点をクリアし、質的分析によって新たな知見を見出すことができたといえる。またこれら2つのつながりのプロセスを「内外からの刺激に対応するための主体による行動選択とそこに至るプロセス」と表現し、「主体としての動き」と定義し、その原動力を主体性として定義した。新たに2つの定義を見出した。

続く第6章では、第5章と同様の手順を用いて、変化が見られないと報告があった事例について、「問題への認識」と「問題への関わり」を分析し、変化が報告された事例（第5章）と比較することにより、変化を実感できるために必要な条件を検討した（検討5）。その結果、変化が見られないと報告があった事例では、現状について整理がつかず、価値を感じられるもの自体があいまいであるために、主体的に動けていない可能性が示唆された。中断を防ぐためには、クライアントのペースに合わせながら丁寧にゴール・セッティングする必要があることが示唆された。

第7章では、より多くの事例における「問題への認識」と「問題への関わり」の変化をとらえるため、PAC分析プロトコルをM-GTAを用いて分析することの妥当性と優位性について検討し、採用が妥当であるという結論を得た（検討6）。

これをうけて第8章では、より多くの事例における「問題への認識」と「問題への関わり」の変化をとらえるため、3回の試行面接の前後に事前事後テストとしてPAC分析を行う実験調査に参加した9名分のデータを、M-GTAによって探索的に検討した（検討7）。事前PAC分析プロトコルから問題のイメージのストーリーラインと結果図、事後PAC分析プロトコルから解決のイメージのストーリーラインと結果図を得た。結果として、問題のイメージと解決のイメージの両方で、主体の動きがみられた。

第9章では、以上の検討を踏まえ、本研究の成果と課題点を明らかにし、「認識と関わりの主体」モデルを提示した（検討8）。認識や関わりの主体としてのクライアントを支援することの重要性や、「技法をいつどのように用いるか」についてのメタ・コミュニケーションにおける留意点を示すことができた。